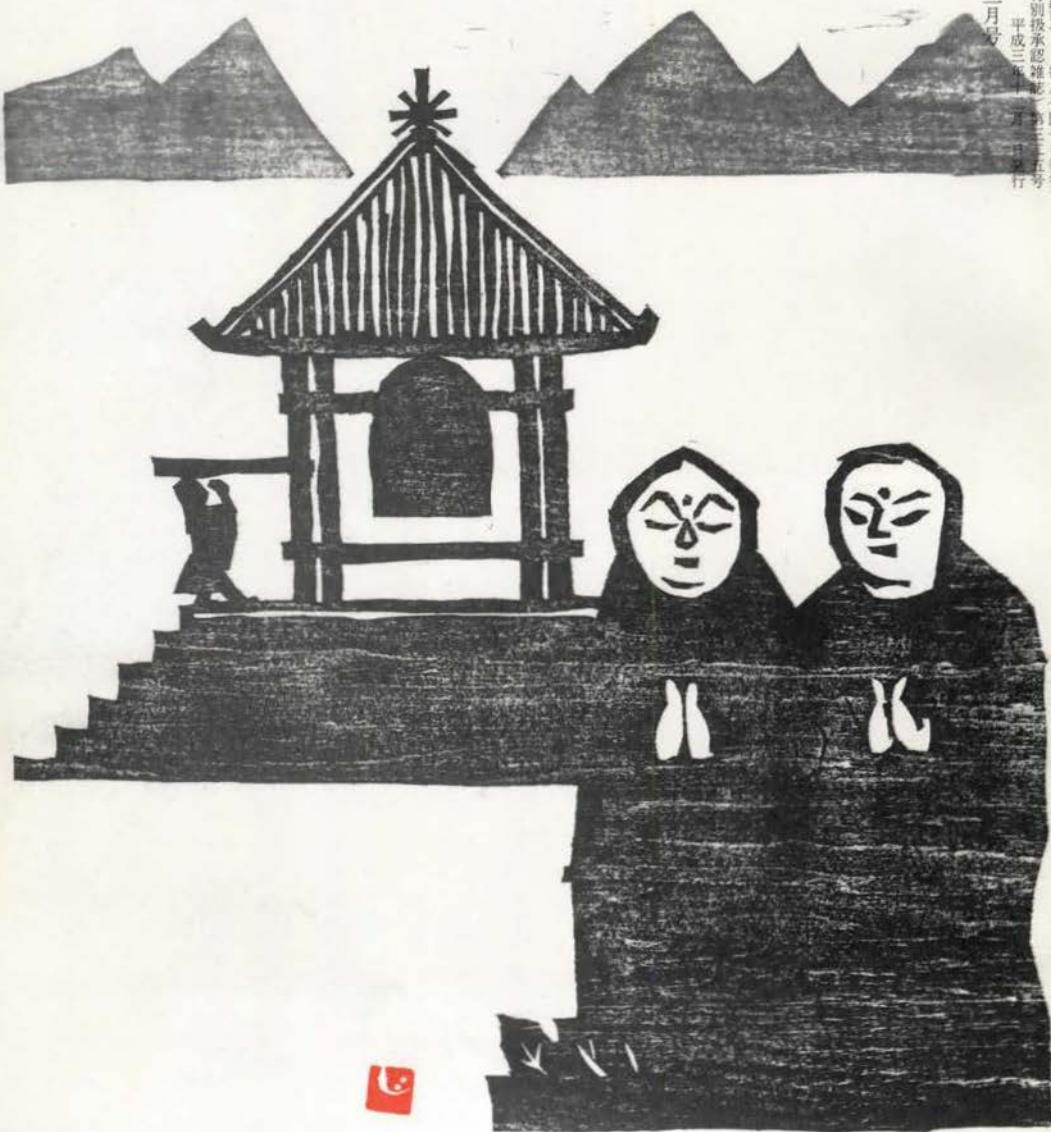
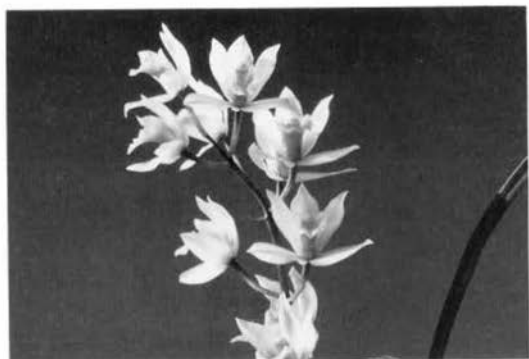


浄土

1991-12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別扱承認雑誌) 第三十五号
平成三年十一月二十五日印刷 平成三年十二月一日発行
第五十七卷 十二月号





十二月の秀句

木がらしや東京の日のありどころ

芥川 龍之介

師へ父へ歳暮まゐらす山の薯

松本 たかし

大年の日落ち流水尚見ゆる

中村 草田男

十二月号



往き易き浄土に入らざらん事、後
悔何事か是れにしかむや。

——『念仏大意』

目 次

一法 話一

無一物 大室了皓.....(2)

ネパールの須弥山図

..... 後藤真康.....(6)
——須弥山図からマンダラへ——

読者のページ

法然上人と式子内親王(下) 河住 玄.....(17)

(ひ)×(と)×(く)×(ち)×(俳)×(話) [8] 仏名会 (16)

季語やぶにらみ (18)

..... 木下隆一(26)

ススキ考①

表紙絵 小林治郎画

法
話

無
一
物



法句經に曰く「これはわが子、これはわが財宝と考えて、愚かなものは苦しむ。己さえ己のものでないのに、どうして、子と財宝とが己のものであろうか」と。

おお
ひろ
りよう
こう
大室了皓

(大本山増上寺執事
東京・品川区光取寺住職)

ではこれらは誰のものであろうか。
「譬喩經」には、次のようなお話が説かれて
いる。

ある王妃が阿難に五百着の衣を寄付した。

それを知った王は、阿難が王妃を騙したとでも思ったのだろうか、すぐさま阿難を訪ねて詰問した。

「五百着もの衣をどうなさるんだ」

「多くの仲間のお弟子たちは、すり切れた衣を着ております。頂いた新しい衣を皆に分けてあげます」

「では古い衣はどうなさるんだ」

「それを敷布に致します」

「今まで使っていた敷布は」

「継ぎ合せて、床の敷物に致します」

「今まで使っていた敷物は」

「足拭きに致します」

「今までの足拭きは」

「雑巾に致します」

「今までの雑巾は」

「細かく切って泥と混ぜ合わせ、お堂の壁を修理致します。全てものは一時的に、私たちに預けられた物、であって、私たちの物、ではありません。ですから大切に最後まで生かして使うのでございます」

王は深く敬服したという。

「六方礼経」には「一つとしてわがもの、というものはない。全てはみな因縁によって、自分に来たものであり、暫らく預かっているだけのことである。だから、一つのもので大切にして粗末にしてはならない」と説かれている。

また浄土三部経の一つ「無量寿経」には、
「有田憂田。有宅憂宅……無田亦憂。無宅亦憂」とある。

いずれも自分の田であり、宅と思っている

から、田があれば田を憂い、宅があれば宅を憂い、田も宅も無ければまた無いことを憂うのである。

自分のものではない、因縁によって暫らく私に預けられたものと思えば、憂うことはないということだが、凡夫の私にはそこまで悟ることは出来ない。

ところが「因縁」を「仏」と置き換え、仏様から暫時預けられたもの、と受け取ると私にも解ってくる。

田を手に入れて自分のものになったのではなく、仏様から「預かってくれ」と言われて、「かしこまりました」とお引き受けした田である。だから「返してくれ」と言われたら、

素直にお返しするもの、全ては「仏任せ」なのである。

「ガンで長いことはない」と聞いていた知人とバツタリ出会って、その元気な姿に驚いていると「肝臓癌と告知されました。家族は諦めていたようです。しかし生きるも死ぬも全ては、仏任せ、と信じて頑張りました。貴重な症例だから学会で発表したい、と癌センターで言っていました」という。

「仏任せ」と全てを仏に託すこと（無一物）が出来れば、憂いはすぐさま消えて、明るく強く生きる力が沸いてくることを知るのである。

◎ “維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一歩一歩前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもつて、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

ネパールの須弥山図

——須弥山図からマンダラへ——



はじめに

先に、本誌昭和六十三年八月号から昨年三月号にかけて、円通寺に保存されて

後ご藤とう真しん康こう

(東京・江東区円通寺住職)

きた存統上人作「世界大相図」を中心に、
仏教の宇宙観である須弥山世界について
ポツポツと紹介させていただいた。その
後、須弥山図に関する資料をそれとなく

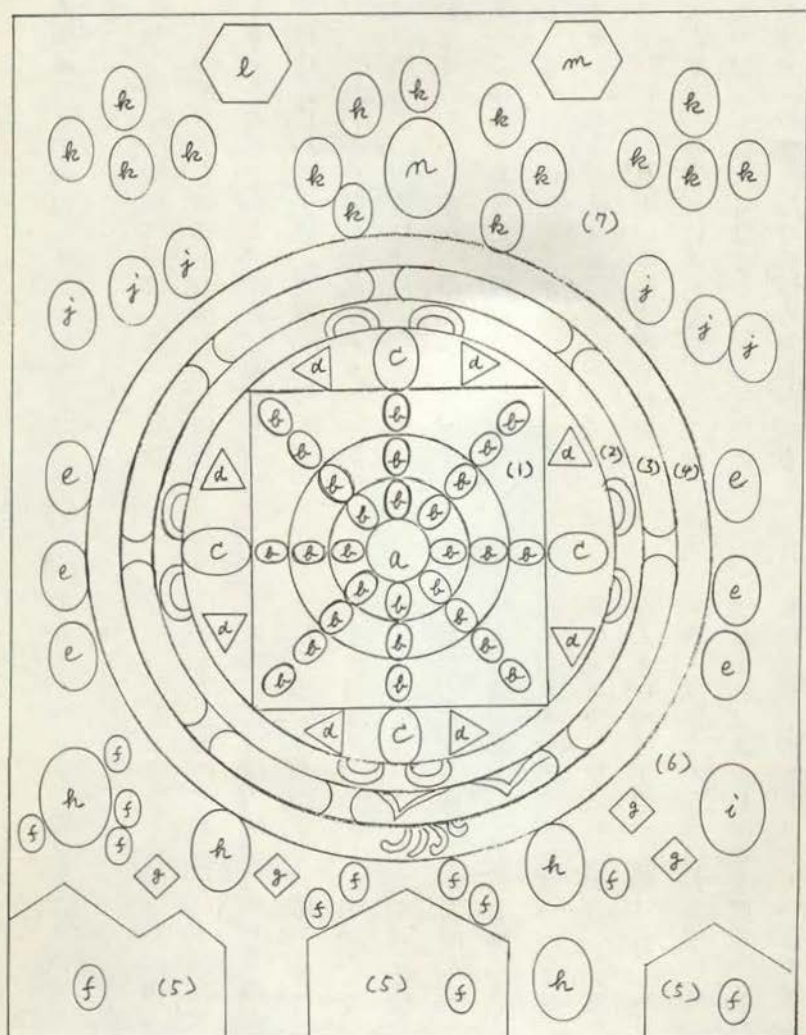
心がけていたのが、最近、ネパールへ観光旅行にでかけた知人がカトマンズの土産物店で求めてきた仏画を入手した。たくさんの仏や天人が整然と描かれた一見曼陀羅のような絵であり、知人もマンダラのつもりで持ってきたのだが、細かく調べてみるとむしろ須弥山図といつてもいいように見える。ちょっと珍しい絵なのでご紹介することにした。

全体の構図

この絵は縦三十八センチ横三十センチの小さな物で、布の上に泥絵の具のようなもので細かく描かれて克明に彩色されている。文字らしいものはひとつもない。かなり痛んでおり何時、何処で描かれた

ものかわからない。仏の顔や服装は中国風よりもインド風である。写真では分かりにくいので、全体の構図を模式的な図に示した。まず絵の中央には一辺十二センチの正方形の区画(1)があり、これを三層の輪(2、3、4)が取り囲んでる。最外層の輪の直径が二十四センチである。正方形の中央には獅子にまたがり、頭に光の輪(頭光)をいただき、左手に宝珠をもった仏(a)が描かれている。これを中心に対角線上に十六人、四辺に平行に十二人、計二十八人の仏と天人(b)がいる。仏と天人の区別ははっきりしないので、両方とも卵形で示した。四辺の外側、最内層の輪との間に各辺に一人ずつの仏(天人)(c)がおり、そ





の両側には2匹の竜（d）が口を開けている。

私がこの絵を須弥山図だと思ったものは、この正方形を須弥山の頂上、切利天だと考えたからである。先にご紹介したように須弥山の頂上は正方形のペランダ状で、きれいな庭園や樓閣があり、中央には帝釈天が、四方には三十二人の天人がすんでいらつしやる。須弥山の四壁は四天王の領地で竜などの八部衆の住処である。この絵の四辺形を須弥山の頂上だとすると、中央の仏（a）は帝釈天であろう。ただし、日本の曼陀羅等では獅子にまたがった帝釈天は見あたらない。他の天人が三十二人ではなく二十八人なのはスペースの関係なのか他の理由がある

のかわからない。四辺の四人（c）は四天王に違いない。

正方形を取り巻く輪の一番内側（2）は、小さな茶色の半円というか舌状のものに青または緑の縁がついたものが三十ならんでできあがっている。これは須弥山をとりまく七金山とその間の内海とみることができよう。七金山は正確には正方形なのだが、輪形と解釈されたこともあるようである。その外の輪（3）は茶色の切れめで八つに区切られており、交互に金と青に塗られており、全体に波浪のような模様が描かれている。これは四大海と大陸であろう。最外層の輪（4）は金と緑に塗られ渦巻き模様がある。これは須弥山世界を乗せている風輪と金輪

とみてよからう。金輪の両側には三人ずつの仏あるいは天人(e)が縦にならんで描かれている。この絵の下三分の一は明らかに地上世界を描いたものである。最下には三棟の立派な宮殿(5)があり、それぞれ有徳の人らしい人物が住んでいる。宮殿の上は樹林(6)象や鹿などの動物(g)と九人の人間(f)が描かれている。人間はみな天をおおぎ見、供物を捧げている人もいる。そしてここにも台座に座し光背を背負った四体の仏(h)が描かれている。うち、ひとつは三つの顔と四本の腕を持ち、もうひとつも三面である。これらの仏は地上世界の人間を済度し賜う観音菩薩や地藏菩薩を表したものではなからうか。そして左隅に描か

れた、三人の人間にかこまれたひとときわ大きな仏(h)はお釈迦様かと思われる。この仏に向かい合う形の一人の人物(i)は台座に乗っているが光背はなく、仏よりも最高位の僧侶のようで、ダライラマのような生仏かもしれない。

絵の上三分の一の部分は天上世界である。ここには紫の雲がたなびき、蓮などの華が咲き乱れている(7)。ここには十六体の仏(k)と六体の天人(j)が描かれている。最下層の五体は頭光がなく、宝珠を上に乗げているので天人であろう。また、ここには蛇のような体をした大獅子(1)と、口に大蛇をくわえた怪鳥(金翅鳥、カルラ、m)も描かれている。

女性を抱いた仏

さて、この絵で大変おもしろいというか奇妙なのは四天王に相当する四体(c)と須弥山のすぐ上に描かれた一体の仏(n)である。この五体はなんと女性を抱いているのである。台座に座し、光背を背負い、座禪を組んだ姿なのに、その太腿の上に白い女体に向かい合う形でまたがっている。女性は両腕を男性の首に回し唇を合わせようとしている。こう書くとかみだらな絵のようだがそうした印象はあまりない。

古代インドでは性行為は宇宙創造の力と解釈され、あるいは、宗教的忘我の境地に通ずるものとされ、各種のミトナ像

(男女交合の神像)が崇拜されてきたという。日本でも聖天様(歓喜天)や一部の道祖神にみられるように、神の性行為が豊作や福運を導くものとして信仰の対象とされてきた。しかしこの絵の男女は特別に性を強調して描かれたものではないようで、女体が白く塗られている他はごくさりげなく描かれている。実は俱舍論等によれば、四天王などの地上に住む天人(地居天)と最下部の四つの天(六欲天)には男女の別があり相交わると説かれている。したがって四天王が女性を抱いていても別に不都合ではなく、この絵は経典の教えを素直に描いただけなのかも知れない。では須弥山のすぐ上に描かれたもうひとつの仏はだれであろう

か。本来なら帝釈天であろうが、忉利天の中央の仏が帝釈天とすればちがってくる。梵天はすでに欲望から解脱した天であるから、これは欲天の最下部の夜摩天（閻魔天）であろうか。インド神話によれば夜摩天は最初の人間、いわばアダムカイザナギノミコトに相当する神であるから女性を抱いた姿もおかしくはない。ただし以上はまったく私の勝手な解釈である。

ところで、ミトナ像や歓喜天像はかなり知られているが、女性を抱いた仏像が描かれた仏画というのは珍しいのではなからうか。インドやチベットの曼陀羅を広く紹介された岩田慶治、杉浦康平氏の著書「アジアのコスモスマンダラ」講

談社（一九八二）、「アジアの宇宙観」講談社（一九八九）にも、こうした絵は見当らない。とすればこの絵はなかなか貴重であり、描かれた場所や時代が分からないのが残念である。

須弥山図から曼陀羅へ

さて、こうして見てくると、この絵は仏典に説かれた須弥山世界観をわかり易く描いたものであるとみてまちがいはなからう。岩田氏らの著書によると、タイ、チベット、中国等ではいろいろなタイプの須弥山図（三界図）が描かれている。

たとえば、須弥山世界観の欲界から無色界へと続く縦の関係を重視し、須弥山を横から見た形の縦型の構図の系統があ

る。存統上人の世界大相図もそのなかに入ろう。ただし、三界のうちでも地獄を特に写實的に描いたもの、天界を詳しく描いたもの等、一部に重点を絞ったものもある。また、ほとんど文字だけで書かれた説明図的なものから、人物や仏を解り易く描いた絵物語的なものまでいろいろな段階があるようである。日本の江戸時代の絵入り百科事典である「和漢三才図絵」では、「山の部」に富士山等と並んで「須弥山」の項が設けられ、須弥山を細長い岩山として描いたなんとも味気ない図が載せられている。これは宗教色をほとんど失った須弥山図といえよう。

一方、須弥山を頂上から俯瞰した形の須弥山図の系統もある。この場合は忉利

天を正方形に描き、それを取り囲む金山や内海を正方形または円形に書いて最外周を円形の金輪でかこむことになる。そしてチベットでは須弥山山頂に住む聖人（仏）の配置を細かく描いた図がつけられ、これが密教系の曼陀羅へと発展していったと言われる。こうしてみるとこのネパールの須弥山図は縦型の構図と俯瞰図とを組み合わせ、須弥山図からマンダラへ変わる過度的なものともみることができよう。

いずれにしてもこれらの須弥山図や曼陀羅は、「和漢三才図絵」は例外として、いずれも信仰の対象として、あるいは布教の生きた教材として使われてきたものと思われる。このネパールの須弥山図を

みていると、信者を前に「この世界には
欲界、色界、無色界の三界があり、地上
の世界の他に天上の世界もあるのだよ。
そして善い行いをした人が天上界に生ま
れ変わることができる。でも、天上もい
つかは死ななければならぬ。そして悟
りをひらいて生死を解脱したのが仏さま
だ。仏さまはたくさんいらつしやり、こ
の世界で苦しんでいる私たちを救いにき
てくださるのだよ」などと分かりやすい
お説教をなさっている坊さんの姿が浮か
んでくる。そして須弥山世界観ではなく、
仏教信仰の土台となった世界観として最
近まで民衆の信仰のなかに生きてきた世
界観であることを、あらためて思い出さ
せてくれるのである。

△日本図書館協会選定図書▽

『江戸物語』

細田隆 善△豊明▽著

四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点
収録／定価一八〇〇円

【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話(〇三三)二六九―二九三・三三六七―六六三七
振替(東京)七―一〇九三／千一六二

(ひ) (と) (く) (ち) (俳) (話) (8)

仏名会

勝崎裕彦

仏名会は、仏の御名^{みな}を唱えて、静かに反省し、心を清める修養の法会である。『仏名経』の所説に基づいて、過去・現在・未来の三世諸仏の名号^{みょうごう}を唱え、心身六根のおのずからの汚れやその年の過まちなど、もろもろの罪障を悔い改めるのである。懺悔消滅、滅罪生善を三千諸仏の御名にすがって祈願する法会である。かつては陰暦十二月の十五日あるいは十九日からの三日間、後には随時の日を選んで、宮中や寺院で年末の恒例行事として営まれていたものである。元来、御仏名はきび

しい寒夜の勤行で、一年を省み、みずからを振り返り、ひたすら仏名懺悔するものである。

肩たれて女人悲しや御仏名（青々）

仏の御名を唱えることといえば、浄土念仏の信仰をすすめる私たちは、まずもって「南無阿弥陀仏」の六字の名号を唱えるお念仏である。歳末師走の忙しい折柄、時に静かな反省の一日一時を設定して称名念仏に励んで、懺悔修養の行をいたすことは大切である。

ゆったりとした気分で、心と身体の大掃除をして、みずからを真摯に見つめなおして反省する。年の瀬の慌しさの中に、念仏の声が高く、そして深く唱和されることである。

ストレスも声に混じりて仏名会（裕彦）

式子内親王のご生涯（下）

四、式子内親王のご生涯

式子内親王の経歴は諸種の人名辞典に記載してあるが、岸信宏上人の「聖如房

河^{かわ}
住^{ずみ}

玄^{げん}



に就いて「『法然上人伝の成立史的研究』第四卷」の記事が最も正確と思われるので、それによって紹介する。御生誕の年月日は不明。皇胤紹運録に「高倉宮」と

あるのは、母儀の従三位成子が後白河院の後宮で「高倉局」と称せられたからである。賀茂齋院記に「大炊御門齋院」とあるのは、父皇後白河院の御殿であつた大炊御門殿を、法皇崩御の後内親王に賜はり、御住まひなされたからである。「平

治元年（一一五九）卜定」とあるのは、賀茂神社の齋院となられたことである。齋院とは京都の賀茂神社に奉仕せられる未婚の皇女あるいは王女の称号である（伊勢神宮では斎ノ宮と申す）。この時内親王は何歳であつたか、記録がない。岸信宏上人は「当時の賀茂齋院は十歳前後の内親王が多く治定せられている」と、慣例に

よつて十歳前後であつたろうと推定している。そうして在任十年嘉応元年（一一六九）七月、疾によつて退任の時、二十歳位であらせた。その後二十年間の消息は不明である。

建久三年（一一九二）四十三歳位、三月十三日父皇後白河法皇が崩御なされた。御歳六十六。その満中陰の法要が内親王の新居大炊御門殿で行われている。

建久五年（一一九四）四十五歳位、六月五日兄君の御室仁和寺の道法法親王より十八道の伝授を受けられた。十八道の次第とは真言宗で最初に受ける、基本的修法である。当時の御心境が、密教の信仰

に傾倒しておられたことが窺い知られるのである。

建久八年（一一九七）四十八歳位、三月参議藤原公時の家人藏人の橘兼仲夫婦の妖言事件が起こった。それは後白河法皇の霊が兼仲の妻につき「我ヲ祝へ、社ツクリ、國ヨセヨ」などの妖言を言いふらしたのである。朝議は兼仲を隠岐へ、妻を安房へ遠流せしめたが、この事件に内親王が関係しておられたという風説が立ち、内親王をも洛外に移し申すことに決したが、沙汰止みとなった。賀茂斎院記に「出家、法名承如法」とある。その年月を詳かにしないが、恐らくこの事件に

かわり、出家落飾によって洛外移居をまぬかれなされたものと想われる。何宗に出家なされたかについては、（五）項で考える。

正治元年（一一六九）五十歳位の時に、五月以降、風氣脚氣などの御病氣にかかれたのである。この事は和歌で親交のあった藤原定家の日記「明月記」に記されている。

正治二年（一二〇〇）五十一歳位、七月に後鳥羽上皇より百首歌撰進の御沙汰があったので、御選びなされ、九月に定家卿にお示しになっている。なお九月ごろ東宮（のちの順徳天皇、当時三歳）を養子と

せられた。内親王は生涯結婚なさらず、独身であらせられたようである。十二月には病氣平癒の願文を日吉社に捧げられている。

建仁元年（一二〇一）正月廿五日御薨去なされた。御歳は五十二歳位と推定する

（この年法然上人六九歳）。

式子内親王が一般に知られているのは、むしろその作歌の面である。藤原俊成に師事し俊成の歌論書「古来風体抄」は内親王に献ぜられたものである。歌集に「式子内親王御集」があり、三百六十首あまり。勅撰集に百五十五首の多数が入集している。その歌風は御鳥羽院口傳

に「齋院はことにもみもみとあるやうに詠まれき」と評しておられる。「もみもみ」とは内部より盛りあがる抒情で、王朝以来、洗練の極みに達した美の伝統、艶の情趣を燃えたたせて、きわめて水準が高く、また新鮮でもあった。

五、同一人説の肯定と否定

法然上人の御伝巻一九に記載されている。「聖如房」が御白河法皇の皇女の式子内親王であるという説は、小川龍彦師の提唱で、それを肯定し、賛成したのは浄土宗総本山知恩院の門主岸信宏上人である。岸信宏上人はその理由として、

式子内親王の傳記の中から、直接に法然上人に教を受けられたというような史料を見出すことはできない。

たゞ父君後河法皇、兄君高倉天皇および静恵法親王と法然上人との関係などより、内親王の周囲が法然上人に因縁のふかいことがわかるのである。自然に内親王も法然上人に接せられる機会があり、浄土の教にも心をよせられたこととおもう。而して唯一の結びつきとなるものは、出家せられて、承如法と称せられたということであり、その承如法が、西方

指南抄の「しょう如ばう」和語燈録

の「正如房」御伝の「聖如房」と変わって行ったという史料である。さらに聖如房を式子内親王として、内親王の伝記をふり返ってみる時に、法然上人との関係において、歴史的矛盾を見出せないということが最も強みである。『法然上人伝の成立史的研究』第四卷に発表の「聖如房に就いて」

と言っている。つまり「承如法」と「聖如房」とは字こそ違へ音が似ているから同一人であるというのである。同音異字の書き方は、中世の文献にいくた例があ

るから一応諒解はできる。しかしこれが「唯一の結びつき」では、あまりにも根拠薄弱で、心もとない。そこで「法然上人との関係において歴史的矛盾を見出せない」と弁解しているのだから法然上人と同時代だからといって、直ちに師弟関係があったと認めて、「最も強みである」と主張するのはいささかおかしい話である。

これに対して聖如房と承如法（式子内親王）とは別人であると同一人説を否定する理由としては、

一、式子内親王の御生涯に、法然上

人と接觸した事実が全く見出だせないこと。

二、式子内親王はすでに四十五歳の頃、兄君の道法法親王から真言宗の十八道の修法の傳授を受けていること。

三、式子内親王の出家名「承如法」は、浄土宗らしくないこと（もし法然上人に帰依して出家したなら、阿弥陀佛名・房号で称すべきこと）。

四、法然上人は貴顕の招請には、無理しても応じてをられること（房龍りの際兼実公の招請に応じている例がある）。

五、舜昌法師が御傳述作にあたり式子内親王の法名承如法と別人の尼聖如房とを混同するとは、到底考えられないこと。

六、御伝卷一九聖如房の記事は舜昌法師の原撰の「法然上人伝記」

(九卷伝)には記載してない。これはその後、後伏見上皇の勅旨によつて、朝廷の才臣が潤色修訂した際に、これを増加したものである。廷臣が百年前に薨去された式子内親王の法名を知らず、誤つて聖如房と書いたとは、到底考えられないこと。

などである。

六、結語

以上、聖如房は果して式子内親王なるか、いなかについて考察してきた。その當否の判断は讀者にお任せする。ただ時分がこの稿を執筆した所以を誌して、結びとする。

式子内親王は後白河法皇の皇女、後鳥羽上皇の叔母君で、少女時代、賀茂神社の齋院を御勤めになり、その後も生涯独身の清操をお守りなされた。また和歌を俊成・定家に學ばれて、優艶の美、幽玄

の趣の最高といわれる「新古今集」を代表する歌人となられた。一方法然上人は浄土宗の開祖で凡夫女人に済度の道を教えられ、しかも自身は堅く戒律を守った高僧である。時代は一致してゐるが、この両者に師弟の関係は從來認められなかった。

ところが昭和の中頃、式子内親王は法然上人の門弟であるという新説が、提唱され、当時浄土宗の総本山知恩院の門主上人（元佛教大學の教授）が、これに賛成なされたので、今では宗門の定説のようになっている。

自分は在家の一信徒で、また和歌の愛

好者でもある。元来保守的な人間で、流行は嫌いである。この事を関知して、驚きかつ迷った。宗門のためにも、歌道のためにも、何とか釈明しなければと思いつながら、過ごしてきたが、この度機縁あって、浅学菲才をかえりみずあへてこの一篇を草した次第である。庶幾わくは大方諸賢の御批判を垂れたまはむことを心よりお願いする次第である。

（了）

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』十二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふたつご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒103 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

季語やぶにらみ(六)

ススキ考(1)

木きの
下した
隆りゅう
一いち

(随筆家)

なぜ、数ある秋草をさし置いて、我々は月
見の景物としてススキを飾るのだろうか
。

庭の一隅に居座って久しいススキの一叢を
眺めているうちに、ふと、そんな素朴な疑問

が湧いた。このススキ、邪魔なので何度か取
り除こうと試みたが、少しでも根茎を残すと
そこから芽吹いて、今年も生け垣の山茶花を
超す勢いで生い繁っている。バカな疑問を
持ったおかげで、暑い盛りを「ススキ」にか

かざらうことになってしまった。

月見と「ススキ」については一先ず措くとして、かねてから私は、ススキを表すのに「薄」と「芒」の二文字があることに疑念を抱いていた。しかし、何で、どうしてと思うだけで、「薄」には感覚的になじめないものがあって、句作の際にも漫然と「芒」の字を使っていたが、今回ふと生じた疑問は、図らずもそれについて考える機会を与えてくれたことになる。

だが、辞書の類に当たってみても、私の疑念は晴れなかった。

すすき〔薄・芒〕イネ科の多年草。各地の山野に群生する。稈・葉は根元から群がって生え、大きな株となる。高さ二―三m。葉は六〇―九〇センチmの線形。秋、茎頭に十数

本の短い枝を分け、長さ一五―三〇センチmのほぼ円錐形で黄褐色の花穂をつける。獣の尾に似るところから、これを尾花という。茎・葉で屋根を葺き、根茎は利尿剤となる。

〔日本国語大辞典〕

薄〔ハク。国訓すすき〕いね科の多年草。茅に似、葉は細長く、とがっている。芒。やぶ、あれくさ・雑草の意。

芒〔バウ。国訓すすき〕いね科の植物の花の外殻にある針のような突起。草の名。長さ四、五尺、「葉皆如茅而大。甚快利、傷人如鋒刃」。——以上「広漢和辞典」

そして、「薄」の字解によれば、「和漢三才図会」を利用して、「薄、厚薄之字。又薄叢也。而倭以為芒字訓」また「草かんむり十薄。薄はあまねく広がるの意。くさはらの意から転

じて、うすいの意を表す」とある。「甚だ快利にして、人を傷つること鋒刃（刀劍のきつき）の如し」は、過去に何度となく、ススキの葉には痛い目にあわされているので分かるが、「又くさむら也。而して倭以て苳（芒の本字）字の訓を為す」から「くさはらの意転じて、うすい^{うすい}の意を表す」に至っては、新たに難問を提起された形になってしまった。

我々の祖先が、漢字が伝来する以前に、既にススキという話し言葉を持っていたことは、「薄・芒」の字をそれに当てたことによっても明らかであるが、一字一字意味と音を持つ漢字の音だけを借りた万葉仮名を検索すれば何か手がかりが得られるかもしれない、そんな思いに駆られて「万葉集」を繙いてみた。これがそもそも間違いの元で、一層深い底な

し沼に踏み込んでしまったのである。私の予想では、全二十巻総歌数四千五百十六首もあるのだから、ススキを詠んだ歌も可成りあるに違いないと踏んだのだが、案に相違して僅かに十五首しか拾えなかった。もつともススキを調べるのが主目的だったから、「尾花」には敢えて目をつむったせいもあるが……。

十五首を書き抜くと次のようになる（◇印は長歌の一部）

◇卷一 45 ― 三雪落阿騎乃大野余旗須為寸、

四能乎押靡草枕―（み雪降る阿騎の大野

に旗すすき小竹を押しなべ草枕）

卷七 112 妹等所我通路細竹為酢寸我通靡細

竹原（妹等がりが我が行く路の細竹^{しの}すすき我し

通はば靡け細竹原）

卷八 160 目頼布君之家有波奈須為寸穗出秋

乃過良久惜母（珍しき君が家なる花すすき
穂に出づる秋の過ぐらく惜しも）

卷八 1637 波太須珠寸尾花逆葺黒木用造有室

者迄萬代（はだすすき尾花逆葺き黒木もち
造れる室はよろづ代までも）

◇卷十 2089 一 鱸丹裳舳丹裳船装真梶繁拔旗芒

本葉裳其世丹秋風乃一（鱸にも舳にも船
装ひ真揖繁貫き旗芒本葉もそよに秋風の）

卷十 2221 我門余禁田乎見者沙穂内之秋芽子

為酢寸所念鴨（我が門に禁る田を見れば左
保の内の秋萩すすき思はゆるかも）

卷十 2277 左小壯鹿之入野乃為酢寸初尾花何

時加妹之手將枕（さを鹿の入野のすすき初
尾花いつしか妹が手を枕かむ）

卷十 2283 吾妹児余相坂山之皮為酢寸穗庭開

不出恋渡鴨（吾妹児に逢坂山のはだすすき

穂には咲き出でず恋ひ渡るかも）

卷十 2285 秋芽子之花野乃為酢寸穗庭不出吾

恋度穩孀波母（秋萩の花野のすすき穂には
出でず我が恋ひ渡る穩妻はも）

卷十四 3506 余比牟路能許騰伎余伊多礼婆波

太須酒伎穂余弓之伎美我見延奴已能許
呂（新室の蜚時に到ればはだすすき穂に出し
君が見えぬこの頃）

卷十四 3565 可能古呂等宿受夜奈里奈牟波太

須酒伎宇良野乃夜麻余都久可多与留母
（彼の児ろと寝ずやなりなむはだすすき宇良
野の山に月片寄るも）

野の山に月片寄るも）

卷十五 3681 可敵里伎弓見牟等於毛比之和我

夜度能安伎波疑須々伎知里余家武可聞
（帰り来て見むと思ひし我が屋外の秋萩すす
き散りにけむかも）

卷十六 3800 者田為々寸穗庭莫出思而有情者

所知我藻將依（はだすすき穂には出で所思
ひてある情は知らゆ我も依りなむ）

◇卷十七 3957 波太須酒吉穂出秋乃芽子花介

保敝流屋戸乎（はだすすき穂に出づる秋
の萩の花匂へる屋戸を）

卷十七 4016 売比能野能須々吉於之奈倍布流

由伎余夜度加流家敷之可奈之久於毛倍
遊（婦負の野のすすき押しなべ降る雪に屋戸

借る今日し悲しく思ほゆ）

ススキの表記がまちまちなのは仮借文字だから不思議はないが、「芒」があるのに「薄」が見当らないのはなぜだ。「はたすすき」に似た語で、「はなすすき」「はだすすき」というのがあるが、どんな違いがあるのだろうか。

「万葉集」のススキの歌と、参考のために「古今和歌集」総歌数千百十一首の中から抜き出したススキの歌八首を書き記した紙を机に広げて、数日間私は沈思黙考した、と言えば聞こえがいいが、実のところは夏バテで全然考えがまとまらなかったのである。しかし「読書百遍意自ら通ず」ではないが、少しづついろいろなものが、おほろげではあるが見えてきた。

「旗すすき」は「万葉集」の語注によれば、旗のように風に靡くすすきの穂の意。「花すすき」と同義、とあって、まあうなずけるが、集中で「花すすき」を用いているのは一首しかない。素直に受け取ればどういうこともないが、「はだすすき」という酷似した語が存在するので、誤写という線も捨て切れない。

十五首のうち「はだすすき」を使ったものが六首もあるからである。「波太」「皮」（これを「はだ」膚・肌」と読むには可成り勇気を要する。波の誤写＋脱字か？）「者田」と三様に記されているが、「太・田」を清音にせず濁音で読ませたのがよく分らない。「はた」と区別したからには、何かそれなりの理由があったはずである。従つて、辞書の「旗すすきの転か」という説明には納得し切れない思いが残る。時代が下つて「古今和歌集」以後、「旗すすき」も「はだすすき」も見事に姿を消してしまつて跡形もない。そして「花すすき」一色になっているのを見ると、一層その思いが募るのである。但し、辞書の説明にも抜け道はある。第二義として、「枕詞。すすきの穂」という意から「穂」（表面・外面の比喩）に、また、その

うら（末葉先）の意から『うら野』にかかる、云々」

「はだすすき」を詠み込んだ六首を見れば、そんな使われ方をしているのは明らかで、枕詞でなければ、他の語句と合わせて特定の語を導き出す序詞の役目を負わされている。どちらにしても「はだすすき」には深い意味はない。これはこの語に限らず、「すすき」は他の歌でも「しの」「はぎ」などの補助の役割を果たしているに過ぎない。つまり「すすき」という三音は、他の二音四音と組み合わせる五音七音を作り、歌の調べを整えるための措辞だったのである。

今年は立秋を過ぎてから、急に蟬が増えた。

蟬の鳴き出しの遅い年は秋冷だというが、いかがなものか。増えたといっても、例年ほどの姦しさはない。年々蟬は少なくなっているのである。しかし、風が死んだ午後、ここを先途と鳴き立てられると、噴き出す汗の量が一段と増すような気がする。

「うるせえなあ！」

と蟬に八つ当たりしても詮ないことだが、一向に作業が捗らないから、苛々は高じるばかりである。

「何か分かったことはあるのか」

「いや、何も……」

「下手の考え休むに似たり、と言うぞ」

「……」

ススキに取り付かれて以来約一か月、何度こんな自問自答を繰り返したとか。

「ああ、いやだ、いやだ！」

今日もまた同じ問答を繰り返すと、鉛筆を放り出して寝転んだ。すると、だらしなく、あつという間に眠りに引き込まれてしまった。近年、夜の睡眠時間が短くなったせいか、慢性的寝不足の状態で、横になるといつの間にか眠っている。眠りに落ちながら、年かなと思ひ、年だなあと自嘲する。気分だけは若者のつもりでいるのに、体がついていけなくなってしまうのである。

夢を見ていた。見渡す限り一面のススキの原に、中級のグライダーが影を落として悠々と飛んでいる。ということは、霧ヶ峰だな！それにしても、何と見事なススキの原であることよ！

(続く)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。が、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十七巻 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成三年十一月二十五日 印刷

平成三年十二月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 南小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三（三三二六）五九四四

〒103（振替）東京八―八二―八七

◇◇ 平成四年用新版 ◇◇

浄土宝暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。

年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 版 総ページ数 40ページ

一部単価 70円 （200ブ以上 特価65円）

送料実費 （300ブ以上はサービスします）

|||||お申し込み|||||

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

（振替）東京8-82187